

・夫への感謝は少数派

（夫の）大多数は、感謝と申し訳ない、の詫び状です。

対して妻たちの反応は、というと、

「夫に感謝されることはあっても、私から感謝することはありません。冗談じゃない。

（五十二歳）」

「我慢、我慢の毎日でした。世界中で私ほど我慢した人間はいないと思うのです。（五十五歳）」

「あなたの詫び状なんていりません。男性としての義務を果たしてきていませんから。

私があなたに詫びることもありません。礼状をもらいたいくらいです。（五十九歳）」

と、けんもほろろで、「今まで、長い間、家族のために一生懸命働いてくれてありがとう。これからは、健康に気をつけて自分のための喜びや楽しみを見つけてください。（五十五歳）」といった夫への感謝は少数派です。

ということは、夫たちは現役時代、家庭を省みることなく、自分本位に生きていた、ということになります。かくいう私自身、結婚直後の数年間を除けば、土曜、日曜以外はわが家で夕食を食べたことはありません。

・強烈。女性は強し。

かつてのベストセラー作家・石坂洋次郎さんの『老いらくの記』（朝日新聞社）を読んでいたら、川端康成夫人と軽井沢の商店街でばったり会ったときの話が出てきます。

石坂さんが、「お丈夫ですね、奥さん」と挨拶すると、「ええ」と明るく笑って、

「あなたもお年寄りだから、私、率直に申しますが、私、川端が亡くなってから、一日まじしに丈夫になったんですよ。今日よりも明日、明後日といった風に……。衣、食、住とも楽しく爽かに過ごしているんですよ。（中略）ともかく、私は川端に死なれてから、この通り、メキメキ丈夫になりましたの。そして、自分が死んで私を丈夫にしてくれた川端を、いい夫だと思えるようになりましたの」

と、おっしゃったそうですが、川端康成の死が自死であることを考えると、夫人の言葉は、さらにリアリティがあります。

・宅内別居生活のきっかけ

あるとき妻と諍いをし、三畳の書斎にふとんを引き入れ、ふすまをピシヤリと

閉めて語ると、これがなかなか心地よく、以後、書斎は私の寝室になってしまいました。

・会社離れ

会社離れというのは、考えてみれば、現役時代から会社と距離をとっておくということではなく、定年後、やるべき目標を持っているということであった。いまになってそのことに気づくとは、能天気ここに極まれりで、恥かしくなります。

・退職金は生活費へ

最初にも書きましたように、私の年金は二五五万八九〇〇円、これに出版厚生基金を加えても三〇〇万円に達しません。しかも所得税と介護保険料を引かれますので、平成十八年に入ってからの年金額は二カ月分で四〇万七一九四円、月額にすると、二〇万三五四七円にしかならない。

結論から言いますと、定年後五年間は毎年四〇〇万円以上の出費があり、現在でも月に三〇万円を切ることができない（表参照）、つまり「収入に見合った生活」ができていませんので、退職金を喰いつぶしながら生活しているのが現状です。

減る；食費、生保、交通通信費、

増える；教育娯楽費、医療費